

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (三十四)

第一章 民族主義と社会主義のうねり (十八)

三十四 ナクバ(大災厄)で覚醒した青年将校(一一二)



ユダヤ人国家イスラエルの独立宣言に対し黙っていられないのがパレスチナに住むアラブ人たちであり、さらにエジプト、ヨルダンなどの周辺アラブ諸国であった。人口規模で言えば独立宣言時のユダヤ人の数は六十〜七十万人程度。一方、周辺のエジプトなどに住むアラブ人は優に百倍を超えていた。旧約聖書の神話に例えればそれはまさにダビデと巨人ゴリアテの戦いに見えた。実際アラブ側の戦争計画者たちは十一日以内にユダヤ軍を殲滅すると予告したほどである。

にもかかわらず1948年から1949年にかけてアラブ諸国とイスラエルが戦った第一次中東戦争は、ユダヤ人国家の独立戦争と位置付けたイスラエルの圧倒的勝利に終わりアラブは惨敗した。その理由は兵力と戦意の差であった。確かに人口比率だけで見ればアラブ人はユダヤ人の百倍以上であったが、実際に周辺アラブ諸国が戦場に送り込んだ兵力はエジプトが約一万人、ヨルダンが四千五百人、イラク三千人、シリア二千人、レバノン千人、アラブ諸国からの義勇兵二千人のほかパレスチナ戦闘員を加えても総勢二万三千人にすぎない。これに対してユダヤ側は正規のハガナ軍だけでも約三万五千人でこのほかにイルグンなどの軍事組織及び武装した入植者が数千人いたのである。さらに装備の面でも欧米のユダヤ人同胞からの最新兵器と豊富な資金を得ており彼我の兵力の差は明白であった。

さらに兵士の士気にも雲泥の差があった。ユダヤ人たちは独立の意気に燃え戦意が高い。それよりも万一戦争に敗れるようなことがあれば彼らには再び「ディアスポラ（離散）」の運命が待ち構えている。ユダヤ人たちにとっては何としても負けられない戦争だった。男はもとより女たちも武器を取って立ち上がった。因みにイスラエルは今でも女性に兵役義務がある。現在の世界各国の兵役は志願制度であり徴兵制の国は多くない。韓国のような徴兵が義務付けられた国でも対象は男性だけであり、イスラエルのように女性にも兵役義務がある国は珍しい。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: [Arehakahazuyal@gmail.com](mailto:Arehakahazuyal@gmail.com)

「白杵陽著「イスラエル」P82他